

日本労働年鑑 第51集 1981年版

The Labour Year Book of Japan 1981

第一部 労働者状態

VI 農家の状態と農民の生活

概要

一、一九七九年一月一日現在の農家人口は、前年比一・三%減少し二一九六万人となり、総人口にたいするその割合は一九%となった。

一、農家数は、前年比一%の減で四七四万戸となった。

一、都府県の経営耕地規模別農家構成は、二ha以上層の微増と二ha以下層の減少傾向がつづいているが、それほど大きな変化はみられない。

一、農家の兼業化傾向は、二兼農家(第二種兼業農家)の増加を中心に進行し、二兼農家の全農家に占める割合は七〇%になった。

一、農業就業人口は、前年比四・三%減少し七九年一月現在六七五万人となった。このうち女子は六二%を占め、女子のウェイトの高さを示している。また基幹的農業従事者は前年より五%減少し四二九万人となり、このうち二九歳以下の若年労働力は男・女ともにひきつづき高い減少を示し、農業労働の老齢化を強めた。七九年一月現在、女子と六〇歳以上の男子の基幹的農業従事者は全体の六九%を占めた。

一、農家の兼業従事者は前年同様微増し八四六万人となった。そのうち雇われ兼業は八二%を占め、また雇われ兼業従事者のうち男子の割合は六四%であった。これを種類別にみると恒常的勤務の割合が七〇%、日雇・臨時雇が二八%と前年とほぼ同じ構成であった。

一、一九七八年一年間の農家の人口異動は増加六四万人、減少九八万人で差引き農家人口の減少は三四万人であった。また年頭初の農家人口にたいする減少率は一・五%と前年なみであった。

一、七八年一年間に他産業に就職した農家世帯員は前年比一二%増加して五九万人に、他産業からの離職還流者は二七%増加して三十一万人になり、差引き二八万人の労働力が農家から流出した。

一、農家世帯の出稼ぎ者はひきつづき減少し、七八年一年間に対前年比六%減じ一五万人になった。このうち五〇歳以上層も絶対数としては減少しているが、若年労働層の出稼ぎ離れを反映して、そのウェイトを高め、出稼ぎ労働者の老齢化がすすんだ。

一、七九年三月に中学以上の学校を卒業した農家の子弟は、前年に比べ三%減じ七四万人となった。このうち自家農業就業者は七六〇〇人にすぎず、新規学卒就業者総数にたいする農業就業率は二・九%に低下した。

一、七八年度の全国一戸当たり平均農家所得は四二二万円で、対前年度比五・九%増加した。農業所得の低迷により農業依存度は二八・三%に、農業所得の家計費充足率は三五%と、いずれも前年度を下回った。

一、七八年度の一戸当たり農家総所得は五〇三万円、勤労者世帯当たり実収入は三七〇万円で両者の格差は三六%であった。しかし、就業者一人当たり収入では約二〇%農家の方が少ない。

一、七八年度の一日当たり農業臨時雇い賃金の主流をなす田植賃金は、前年比五%増加し五〇二九円であった。この田植賃金に比べると、他産業賃金は左官賃金・大工賃金の六七%高を筆頭にいずれも高かった。

日本労働年鑑 第51集 1981年版

発行 1980年11月25日

編著 法政大学大原社会問題研究所

労働旬報社

****年**月**日公開開始

■←前のページ 日本労働年鑑 1981年版(第51集)【目次】次のページ→■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
